

「0」から生まれる都市の余白

— 代々木公園に提案する、自然と共生するパブリックスペース —



四則演算

都市には、人が「佇む場所」が足りない。

都市は、人と建築の相互作用である四則演算を繰り返しながら形成されてきた。その積み重ねの先には、本来「人と建築、人と人の豊かな関係」が築かれるはずだった。しかし、均質化された建築と、生産性が追求された計画によって、人と空間の関わりは次第に希薄になっている。

この状況を生んでいるのは、無数に加えられた四則演算の結果ではないだろうか。

だからこそ、一度「0」に立ち返る。何もない状態から、新たな四則演算を始めることで、人と人、建築と人が自由に作用し合う、豊かな関係性を再構築する。

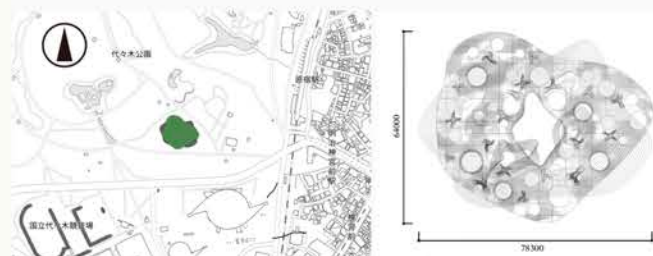
設計趣旨

本提案では、「0 = グランドレベル」と定義し、地形の操作によって建築の原点に立ち返ることを試みる。一般的に、建築は土地の上に築かれる。しかしここでは、地形を削り、掘り、「0」を建築に取り入れることで、建築と地形が溶け合う空間をつくる。

この場に働くのは、人と建築と自然が響き合う四則演算である。

ここでは、建築は単なる形ではなく、都市の中の地形として存在する。地面の起伏が人を誘い、木々の間を風が抜け、日々の営みが自然と溶け込んでいく。

それは、建築が本来持っていたはずの、土地に根ざした姿を取り戻す試みでもある。



敷地の設定

敷地は都立代々木公園。

周辺の表参道や原宿は、商業施設や計画された動線が張り巡らされている。一方で、代々木公園は都市にはない「佇む」という機能を備えた人々の憩いの場となっている。計画された動線に縛られることなく、自由に過ごす余白がある。この場所こそ「0」に立ち返ることができる。

人・建築・自然に「 $+$ 」「 $-$ 」「 $\times$ 」「 $\div$ 」（四則演算）が作用する

$+$ （足し算） 関係性を生み出す

都市に足りないものを、この空間に加える。「人+人」の出会いが生まれ、「自然+建築」が一体となり、都市の中に新たなつながりを生み出す。

$-$ （引き算） 都市の喧騒を和らげる

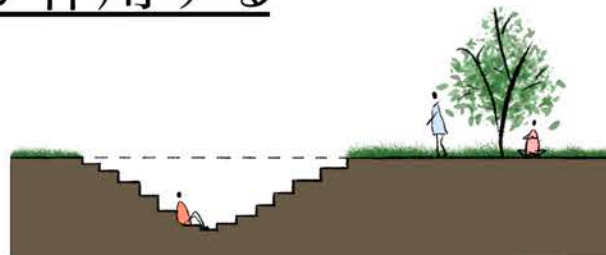
「人工物-境界」により、建築と自然の境界を曖昧にし、風景の中に溶け込む空間をつくる。

$\times$ （掛け算） 多様性が掛け合わさる

公園という時間や人に制限がない場所では、「時間 $\times$ 体験」によって多様な人々、用途、時間の掛け合わせが、この場の価値を増幅させる。朝はジョギングする人が通り抜け、昼は子供が遊び、夕方には仕事帰り、学校帰りの人が佇む。

$\div$ （割り算） 空間を分け合う

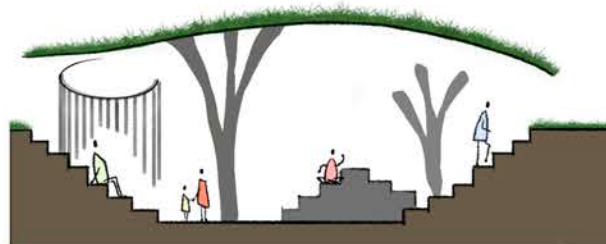
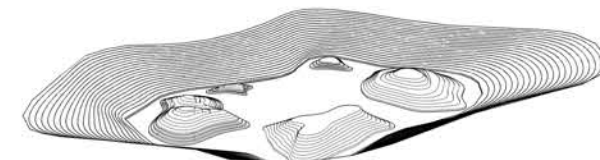
誰かの所有ではなく、誰もが自由に使えるパブリックスペース。「1つの空間 $\div$ 多様な使い方」によって、訪れる人それぞれが思い通りの居場所を見つける。



地形を下げ、空間を作る。自由曲線からなる階段。



内部の階段により居場所が増える。間に通路や広場が生まれる。

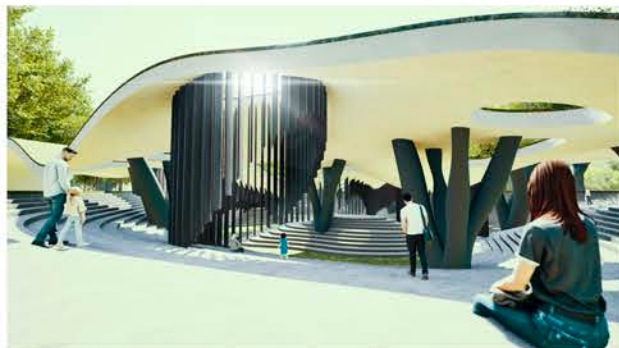


柱とルーバーで緩やかに空間を区切り、居場所をつくる。



並木道から見える建築

視覚的に続くグランドレベルが、周囲の自然と一体化しながら空間をつくり出す。その先に何があるのかを想像させ、人を引き込む。入りたくなる、歩きたくなる、佇みたくなる。そんな直感的な魅力が、人々の好奇心を引き出し、新たな出会いや交流を生み出していく。



木漏れ日をデザインしたルーバー

完全に閉じるのではなく、柔らかに空間を区切ることで、周囲とのつながりを保ちながらも、独立した居場所を作る。ルーバーからの木漏れ日に包まれた空間が、開放感と安心感を同時にあたえる。



地形をかたどる階段

地形をイメージした自由曲線の階段は、間に通路や広場をつくる。この造形により人々の動きは自由になり、空間を歩くことそのものが一つの体験になる。歩く途中で気軽に立ち止まり、階段に腰掛けることで、くつろぐことができる。



周辺環境との融合

樹木をイメージした柱と、屋根の穴からの木漏れ日によって周囲の環境を建築の中に取り込む。建築全体のデザインと、周囲の環境の一体感が空間に魅力をもたらし、居心地の良い「佇む場所」として機能する。